

矢島は、預金残高を確認するために、銀行に電話を入れた。

「ありがとうございます。みずほ銀行横浜支店でございます」

「あの、通帳の残高を確認したいのですが」

「かしこまりました。それでは、折り返しお電話でお知らせすることになります  
が、よろしいでしょうか？」

「はい、結構です」

「それでは、お口座番号とお名前をお願いします」

「はい、普通預金の四一四七二四一、矢島守です」

「銀行にお届けになっているご住所と、お電話番号をお願いします」

「住所は横浜市中区山下町二―四―二七、電話番号が〇四五―二二四―一七二二  
です」

「〇四五―二二四―一七二二ですね。かしこまりました。私、野田と申します。  
すぐにお調べして折り返しお電話いたしますのでお待ち下さいませ」

「はい、わかりました。ではよろしくお願いします」

受話器を置いてから数分後、電話が鳴った。

「はい、矢島です」

「もしもし、みずほ銀行横浜支店の野田と申しますが、矢島守様でいらっしゃい  
ますか？」

「はい、そうです」

「先程お問い合わせいただきました、普通預金残高を申し上げますがよろしい  
ですか？」

「はい、お願いします」

矢島はあわててメモの用意をした。

「ただ今の残高、七十七万五千四百四円となっております」

「七十七万五千四百四円ですか？ ええと、振込が一件あったと思うんですが」

「そうですか。どちら様からおいくらのお振込ですか？」

「中山道雄という人から四万二千円振り込まれているはずですよ」

「それでは振込の確認をしてみますので、少々お待ち下さい」

受話器からは保留メロディが流れ、数十秒後・・・

「大変お待たせいたしました。ただ今お調べしてみました、中山道雄様という  
方からのお振込は今のところないようです」

「確かに昨日、手続きを済ませたと言っていたんですけど」

「電信振込か文書振込、どちらで手続きされたかご存知ですか？」

「いいえ、わかりません」

「電信扱いですと当日入金になります、文書扱いですと入金までに多少お時間を  
いただくことになりますので、おそらく中山様は文書扱いで振り込まれたので  
はないでしょうか？」

「そうかもしれません。ではその場合、入金されるのはいつ頃になりますか？」

「通常は二、三日で入金となります」

「そうですか。早ければ明日には入金されるかもしれませんね。ではまた明日、  
確認してみます」

矢島は少しホッとした表情で受話器を置いた。